

# 1. 国旗一覧表 (国旗の由来説明あり)

アジア									
 <p><b>アゼルバイジャン</b> 1918年から1920年までの国旗を修正して現在の国旗の形になった。上の青色はトルコ民族を表す。中央の赤は近代化への貢献を表現している。月のわきの八角星はこの国に住む8つの民族に由来している。</p>	 <p><b>アフガニスタン・イスラム共和国</b> この国のたくさんの政変や国難に影響されて、国旗は20世紀の間に16回も変更されている。一番新しい国旗は、アフガニスタン王国時代のデザインをもとに、紋章の大きな部分を補正し、新憲法が施行されたのを機に掲げられた。</p>	 <p><b>アラブ首長国連邦</b> 連邦の7つの国のうち、フジャイラ以外は赤白2色の旗がある。連邦大統領旗は、中央の白色の部分に、胸に国旗と7つの星をつけたタカの国章がデザインされている。</p>	 <p><b>アルメニア共和国</b> 1918年から1921年まで使用された旗の比率が変わったものが現在の国旗。赤色は共和国のために流れていった人たちの血を表し、青色は永遠の国土を表現。オレンジ色は勤労と勇気を表現してデザインされている。</p>	 <p><b>イエメン共和国</b> 南イエメンと北イエメンの統合時にできた旗である。赤色は自由と南北の統一のために流れた血を表し、白は輝ける未来を表現。黒は、以前の暗黒の時代をイメージしてデザインされている。</p>	 <p><b>イスラエル国</b> 19世紀末のユダヤ建国運動時に使用されたものがモチーフ。白と青は礼拝のときに使うシュールの色に由来し、真ん中には「ダビデの盾」が配置されている。ダビデの盾は、ユダヤ人が昔からお守りとして大切にしていたものである。</p>	 <p><b>イラク共和国</b> 横に3色配置された旗の赤は勇気と、白は寛容を、黒はイスラム教の伝統と栄光を表している。国旗の真ん中には、イスラム教を表す緑色のアラビア書道クーフィー体で、「アラーの神は偉大なり」と書き加えられている。</p>	 <p><b>イラン・イスラム共和国</b> 横に3色緑・白・赤で構成され、白の両端には「アッラー・アクバル（アラーの神は偉大なり）」とアラビア文字で11回、計22回書かれている。中央の4つの三日月と剣では、「アラーの神は偉大なり」と書き加えられている。</p>	 <p><b>インド</b> サフラン色は、自己犠牲の精神と勇気を表し、緑は弱者救済と信仰、白は平和と真実を表している。しかし、本来はサフラン色と緑はそれぞれヒンドゥー教徒とイスラム教徒に由来している。</p>	 <p><b>インドネシア共和国</b> 13世紀にできたマジャパヒト王国が赤と白の2色の国旗を使ったのが発祥。1928年にインドネシア国民党がジャワで最初に掲げた。配色はモノコ国旗と同じであるが、インドネシア国旗は縦横比が2:3となっている。</p>
 <p><b>ウズベキスタン共和国</b> 上段の青は生命の源である水を表し、中段の白は平和を、下段の緑は豊か自然を表す。間月の赤い線は、生命力を表現。新月はイスラム教国であることと国の独立のシンボルであり、12個の星は王道十二宮に由来している。</p>	 <p><b>オマーン国</b> 1970年までは、赤一色だけの国旗が採用されていた。赤は侵入者に対しての争いを表し、緑は豊か豊かな国土を表現。白は平和と繁栄のシンボルで、旗半側に紋章があらわされている。これは、オマーン古来の剣と短剣カンジャルを組み合わせた国章である。</p>	 <p><b>カザフスタン共和国</b> 青色は、カザフスタンの遊牧民が見ていた澄みきった空の色で、平和と幸福のシンボルである。真ん中に描かれた黄色のワシと太陽は、それぞれ自由と明るい希望を表現し、旗半側のアラベスク文様はカザフ民族の伝統的な装飾となっている。</p>	 <p><b>カタール国</b> 現在ではイエ茶色が正式な色であるが、もともとは赤か太陽光線で退色したものだといわれている。左側の白のジグザグ模様は、この国が9つの行政区で構成されていることを表すという説がある。</p>	 <p><b>カンボジア王国</b> 独立してから何回も変更されているが、世界遺産のアンコールワット遺跡は、政権が変わってもいつも国旗のデザインに採用されていた。旧王国時代の国旗が復活したもので、1948年から1970年に使用されていたのと同じ。</p>	 <p><b>キプロス共和国</b> 旗の中央にキプロス島をかたどったデザインが施され、その下にオリーブの枝があらわされている。国連の発想と似通っている。オリーブの枝は、トルコ系とギリシャ系の両国民の平和と協力を表し、黄色は古来からの特産品や銅などの豊富な地下資源を表現している。</p>	 <p><b>キルギス共和国</b> 赤地に、黄色でキルギス人の伝統的な移動式住居「ユルト」の天井と太陽が描かれている。太陽が放っている40の光線は、この国の代表的な40部族を表している。キルギス民族を統一した英雄マナスが赤旗を使用したこと由来しているといわれている。</p>	 <p><b>クウェート国</b> 黒・緑・白・赤を配置したデザインで、この4つの配色はアラブ諸国で多く使用されるため汎アラブ色といわれている。左側に黒の台形をあらわした珍しい旗で、以前のイラク国旗の影響が大きい。</p>	 <p><b>サウジアラビア王国</b> 地色の緑は、イスラム教の聖なる色である。右から左にアラビア文字で「アッラーのほかに神は存在しない。マホメット（ムハンマド）はアッラーの預言者である」と書かれている。剣は聖地のメッカを守護する意味合いを持っている。</p>	 <p><b>ジョージア</b> 12世紀から14世紀にかけて使われた中世グルジア国旗（サアカヴィリ大統領が率いる与党の「国民運動」の党旗にもなっている）をもとにして作られた。中央の大きな赤十字の四隅に4つの小さな赤十字を描いていて、エルサレム十字と呼ばれている。</p>
 <p><b>シリア・アラブ共和国</b> 1932年に自治国となってから国旗を6回変更している。ほとんどが赤・緑・黒の汎アラブ色を使用している。現在の国旗は1958年から1961年までのアラブ連合国時代の国旗が復活したもので、赤は国を守る剣を表し、白は国民の善意を、黒は過去の闘争を、緑の星は美しい大地と諸国の統一を表現。</p>	 <p><b>シンガポール共和国</b> 植民地だった1959年に掲げられたが、マレーシア連邦の州時代には州旗としても兼用されていた。赤は世界全民族の友好と平等を表し、白は潔白と美徳を表現、5つの星は「民主主義・平和・進歩・正義・平等」が進展することを願い、三日月は発展する国家のシンボルである。</p>	 <p><b>スリランカ民主主義共和国</b> 独立した3年後に、イスラム教徒を表す緑と、ヒンズー教徒を表すオレンジ（サフラン色）のラインが採用された。剣をもつライオンは、この国のシンハラ人の伝説に出てくる動物である。四隅の葉は菩提樹で、スリランカの約70%を占める仏教徒を表現している。</p>	 <p><b>タイ王国</b> 「トーン・トライロング」（三色旗）と呼ばれる。1916年までは赤地に白像をデザインした国旗だったが、国内を巡視していた国王がたまたま逆に掲げられていた国旗を見て、上下左右を反対にしても同じに見える国旗に変えたという逸話が残っている。</p>	 <p><b>大韓民国</b> 赤と青のともえが中央に描かれている。ともえは韓民族に昔から親しまれてきたデザインで、旗の図柄は陰陽五行説に由来している。国旗の原案は、朝鮮王朝の末期の国王である高宗によるもの。</p>	 <p><b>タジキスタン共和国</b> 真ん中の紋章はさまざま階級の人々の統一を表現。赤は主権と労働者を表し、白は綿花と知識人、緑は農産物と農民の象徴である。赤・白・緑の配色がイランの国旗と同じなのは、タジキスタンの民族がイラン系であるから。</p>	 <p><b>中華人民共和国</b> 「五星紅旗」と呼ばれ、1949年に3000ほどのデザインの中からコンテストで優勝した曾連松のものを選び、修正して国旗にした。中国革命と中国人民の一致団結のシンボルであり、階級や民族を表すという説は否定的である。</p>	 <p><b>朝鮮民主主義人民共和国</b> 上下の青いラインは平和への関心を表し、赤は人民の不屈の精神と社会主義であることを、星は朝鮮労働党の指導的役割を表現。白は古来からこの国の人たちが親しんできた色で、純潔と光明のシンボルである。</p>	 <p><b>トルクメニスタン</b> 独立してから3つ目の国旗にあたる。地色の緑はイスラム教を表し、新月は明るい未来を、5つの星は人々の夢を三日月と星が出でて、将来コンスタンチノープルを征服することを予言したという逸話が残っている。</p>	 <p><b>トルコ共和国</b> アイ・イルディズ（月と星）と親しみを込めて呼ばれる新月旗。オスマン帝国の初代皇帝の夢に三日月と星が出でて、将来コンスタンチノープルを征服することを予言したという逸話が残っている。</p>
 <p><b>日本国</b> 法律上は日章旗と呼ばれ、一般的には日の丸として親しまれている。1854年から国旗として使用され、1999年の「国旗国歌法」で正式に法で定められた。7:10の比率で、日の丸の中心が左寄りのものも許容されている。</p>	 <p><b>ネパール連邦民主共和国</b> 1962年までの国旗には月と太陽に顔が描かれていた。3角を2つ重ねた珍しい国旗である。上の月は王室を表し、下の太陽は宰相一家を表現しているが、それと同時に月や太陽がある限りこの国が存続するようにとの願いも込められている。</p>	 <p><b>パキスタン・イスラム共和国</b> 1906年に結成された全インドムスリム連盟の旗がもとになってできた。独立時に左側に少数民族の象徴である白い縦ラインを配した。緑色と新月と星で構成される典型的なイスラム教国の国旗である。</p>	 <p><b>バーレーン王国</b> かつての国旗はジグザグ模様だったが、8個だった旗直線だったが、バーレーン王国に国名を変更した際に国旗と元首旗のデザインを変えた。赤色はペルシャ湾岸諸国に昔から親しまれてきた色である。</p>	 <p><b>バングラデシュ人民共和国</b> 緑地に中央からやや左寄りに赤い円が描かれる。独立戦争時には円の中に金色の地図のデザインだったが、旗の両面に表示するのが難しいので除外された。緑は豊かな大地を表し、赤は独立戦争で流された血を表現。</p>	 <p><b>東ティモール民主共和国</b> 1975年11月に独立宣言をした際に使った旗を修正した図案である。赤は独立戦争で流された血を表し、黒は植民地時代の暗黒と克服するべき困難を、黄色は植民地主義の傷跡を表現。白は平和を表し、星の形は未来への希望のシンボルである。</p>	 <p><b>フィリピン共和国</b> 1898年に香港に亡命していた愛国者連合により最初の旗が掲げられた。青は高潔な理想を表現し、赤は国民の勇気を表し、白と平等を表現。太陽は自由を表し、8本の光はスペインに最初に抵抗した8州を、3つの星はルソン島・ミンダナオ島・ビサヤ島の象徴。</p>	 <p><b>ブータン王国</b> 旗に竜を配するのは、国民に崇拝されていると同時に中国の影響を受けているから。黄色は王家の権威を表し、オレンジ色はラマ教（チベット仏教）の修行を、白は純潔と忠誠を象徴している。</p>	 <p><b>ブルネイ・ダルサラーム国</b> はじめの国旗は黄色の1色だった。1906年に白と黒の斜めラインが加わり、1959年には中央に国章を配するようになった。国章はイスラム教を象徴する新月と、平和を象徴する両手を添えるデザインとなっている。</p>	 <p><b>ベトナム社会主義共和国</b> 金星紅旗（ベトナム語でコードーサーオバーン）と呼ばれ、1955年までは星の角度が球在よりも大きかった。五芒星はベトナムを構成する労働者・農民・兵士・青年・知識人の5つの社会階層の象徴となっている。</p>
 <p><b>マレーシア</b> シンガポールが分離するまでは紅白の横ラインの数と14角星は州の数を表していたので、星条旗の影響を受けているデザインといえる。赤・白・青の3色は以前の宗主国のイギリス国旗にちなんでいる。市民用の海上国旗は、赤地の旗で旗竿の上部に国旗を配している。</p>	 <p><b>ミャンマー連邦共和国</b> 1974年から使用してきた赤旗をやめ、上段から黄・緑・赤の3色旗とした。真ん中の大きな白星は永続する連邦を意味する。緑は国民の団結を表し、赤は豊かな自然と平和と安らぎを表し、白は決意と勇気を表現している。</p>	 <p><b>モルディブ共和国</b> 19世紀までは赤1色の旗であったが、20世紀初頭の宰相によって緑色と新月が採用された。緑はヤシと平和と繁栄を表し、赤は独立のために流された英雄の血を、白はイスラムの信仰を表現している。</p>	 <p><b>モンゴル国</b> 真ん中の縦ラインの青色はモンゴルの伝統色である。左側に配したマレークは、ヨソフ（蓮台）という民族の伝説あるシンボルで、太陽・炎・月・矢・魚をかたどったともえが描かれている。ヨソフは、自由・団結・繁栄・神聖・主権・高潔などを意味する。</p>	 <p><b>ヨルダン・ハシメット王国</b> 汎アラブ色で構成される旗で、黒・白・緑は、それぞれ歴史上のアッバク・ウマイヤ・ファティマ王朝を表現している。赤は現在の王家であるハシム家を表し、白の7稜星はイスラム教徒の一致団結を表すともえに、コランの第1節の第7行への敬意を表現している。</p>	 <p><b>ラオス人民民主共和国</b> 1952年のラオス愛国戦線の旗がもとになったデザイン。赤は独立戦争で流された尊い血を表し、青は国民の豊かさを、中央の白丸はメコン川にのぼった満月と共産主義で国を統一することを表現している。</p>	 <p><b>レバノン共和国</b> 真ん中に描かれたこの国のシンボルであるレバノン杉は聖にも登場し、フランス統治時代には3色旗の中に配されていた。白は雪山と純潔を表し、赤は勇気と植民地支配と戦った戦士の尊い血を表現している。</p>			